

二十五年ぶりの教育実習

—イギリス公立幼稚園保育参加顛末(4)—

豊田 一秀

目に見える小さな「現れ」は、その背後に存在する大きな問題を示唆している場合が多い。この事は保育に關しても当てはまる事である。前回、九月号の誌面で、私は幼児の要求に応えるべく繰り返し冠作りをして、ある女児との関係を深めて行ったエピソードについて述べた。そして、その中で、イギリスの子どもが

余り保育者に対して要求をしない事について原因を類推した。幼児から保育者への要求や働きかけ、誘いが少ないという事は、保育者からの幼児への要求が幼児からのそれに勝っている、もしくは、保育者と幼児の關係性に於いて、幼児が保育者から「与えられる者」として存在していると見る事も可能であろう。この事

は「幼稚園とは何をする所なのか」という大きな問題にも関わってくる事柄である。今回は、イギリスの保育者の計画、動きや配慮を通して、イギリスの教育行政の求める教育内容と日々の保育との関わりについて検証してみたい。

「与える」保育と教師の役割分担

私が保育参加を許されている公立幼稚園の概要については、連載二回、六月号に既に述べたので、ここでは詳細を省くが、各クラスは約二十五人の幼児に対して基本的に常勤の職員二人（資格は教師と保育）と非常勤の保育二人の合計四人の保育者によって運営されている。四人の保育者の役割分担は流動的であるが、一日の保育は以下のような流れで始まる。少し長くなるが六月号から引用する事をお許し頂きたい。

「さて、その日、先生のクラス全体への言葉かけは、九時二十分に出勤をとる事から始まった。九時に登園



▲先生とゲームをしながら数の勉強。無理にやらせる事はないが、ゲームのやり方は前以ってはっきりと決まっています。幼児はそれを守らなければならない。

した子どもは二十分程車座になってカーペットの上で待っているわけである。絵本を出したり友達と軽くふざけたりしている。出欠を取り終わると先生はテーブルに用意されたいくつかの活動について説明する。その日に先生が用意した活動コーナーは1、ケーキ作り2、粘土 3、屋内用の水遊び 4、文字ならべ、であった。先生は初めに五、六人の名前を呼んでケーキコーナーに行くように指示する。ケーキ作りには定員があるのだろう。呼ばれた子どもはボールや粉の置かれた机に座る。呼ばれなかった子どもが自分もやりたいたいと言ったり、呼ばれた子が他の活動をしたと言ったりすることは無い。スムーズに事が運ぶ中に、子どもたちがまだ自分を出していない感じを私は受ける。他の子どもたちは、めいめいに興味を持った机に行く。机ごとに先生が座って指導する。何しろ先生は四人も居るのだ。前述の四種類の活動の他に子どもたちは絵本を読んだり、レゴや積み木で自由に遊んでも良

いが外で遊ぶ自由はない。安全確保のため、先生が外にいる時でない子どもは外で遊ぶ事はできない」。

この記述からも分かるように、イギリスに於いて複数の保育者がクラスに存在するという事は、第一に、幼児の活動に対する選択の幅を保障するものとして作用していると言えよう。祭りの時に、多くの屋台が出ていた方が、その中から子どもが好きな店を広く選べると例えたら良いだろうか。ここでポイントとなる事は、基本的に幼児は活動を選ぶ事が許されているが、その選択には保育者が用意した範囲の中からと言う枠組が条件として付いているという事である。そこには保育者によって設定された活動以外のモノを幼児が選ぶ自由はない。保育者Ⅱ与える者、幼児Ⅱ与えられる者と言う図式が存在している。そして、この考え方の奥には、幼児が自らの力で工夫して各人の生活を作り出して行く事よりも、保育者が前以って計画した、幼児に良かれと考えた計画を幼児に与える事に価値を置



▲自由な遊びの時間。先生たちはお茶を楽しみながら子どもたちの遊びを見守っている。

いた保育観が存在している一つの証左になるだろう。

保育者が「与える事」を強く意識した保育は一つの特徴を持つているように私は思う。それは、保育者が十分に「与えた」と感じた後にはそこから先に活動が続かないと言う事である。私の参加しているこの幼稚園では一つの活動が済むと自由遊びの時間となる。多くの子どもは園庭で遊ぶが、この時間は子どもにとっても、また保育者にとっても息抜きの時間となっている。この時の保育者の最大の役割は幼児の安全管理であり、保育者はほとんどの場合幼児と遊ぶ事はない。保育者はこの時間、紅茶等を飲みながら幼児の遊びを見守っている。イギリスの伝統であるティータイムはここでも顕在である。また冒頭に述べたように、この時間、幼児から保育者を遊びに誘ったり、困った事の解決を保育者に求めたりすると言ったような、幼児からの保育者への働きかけも少ない。又、この時間、子ども達は与えられた時間の長さを知っていて、

深く遊び込む事が少ない。そして、次に保育者に呼ばれると、すぐにその活動に移って行く。

一日の保育における四人の保育者の役割分担を次頁の表に示したが、この表からもうかがえるように、一日の保育を予定通りに消化するためにかなり細かい役割表が作成されている。この表を見てみると、あたかもスムーズに舞台を進めて行くための演出のスケジュール表のような趣を感じてしまうのは私だけであろうか。幼児は観客Ⅱ受け手なのである。

イギリスの行政による幼稚園教育のねらい

私の参加している公立幼稚園において、保育の形態が幼児に「与える事」を色濃く出している点について示してきた。イギリスの幼稚園のこのような在り方は、一体どこから来ているのであろうか。イギリスの伝統的な教育風土、両親の期待等、様々なものが要因として絡み合っていると思われるが、ここではイギリ

スの幼稚園の保育内容、保育方法を規定しているイギリスの行政による幼稚園教育のねらいに目を向けてみたい。

日本の教育要領は五つの領域から成っているが、イギリス版教育要領とも言うべき『幼児の学び（学習）へ向けての望ましいねらい』（DESIRABLE OUT-COME FOR CHILDREN'S LEARNING）では、以下のように六つの項目に分けて、そのねらいについて述べている。

① 個人的、社会的発達、② 言葉と文字、③ 算数、④ 世界に対する知識と理解、⑤ 身体的成長、⑥ 創造性の発達。これらの項目を一瞥しただけで、日本の五領域と比べその性格が大きく異なっている事に気付く。第一に感じる違いは、幼児に対し大人の計画した事柄を学ばせたいと言う姿勢が強い事である。この点を日本の「教育要領」と比較してみると興味深い。すなわち、教育要領の中では幼稚園教育の目標について五項

表 日案の枠組みと4人の保育者の役割分担の一例

時間	予定	担当教師
9:00	幼児を迎える、出席 課題活動	A先生 B先生
9:15	外遊び一回目 その後の外に出た子ども担当	A、C先生 B先生
9:30	言語のグループ指導Ⅰ	C先生
10:00	お話／フルーツ 教師休憩1 教師休憩2	B先生 A、D先生 B、C先生
10:30	課題活動 水遊び担当 片付け	A先生（C先生補助） B、D先生 B、C先生
11:00 (同時進行)	部屋に集まって何かする 言語のグループ指導Ⅱ	B先生 C先生
11:30	昼食	A、C、D先生 午後はD先生は帰宅
12:00	教師休憩	B先生（休憩室で昼食）その後A、C先生も
12:30	一日保育の子どもを外で担当	C先生
1:00	午後の子どもを迎える 課題活動	B先生 A先生
1:15	外遊び一回目 その後に外に出た子ども担当	B先生 C先生
2:10	お話／フルーツ その後自由遊び	B先生 C先生
2:30	そうじ室内 (子どもは軽く手伝う程度)	A先生
2:45	そうじ室外	B先生
3:00	集まり	A先生
3:20	降園	

目に渡って述べているが、その中で「養う」「培う」と言う言葉が多く使われていて、幼児の内面からの育ちに重きが置かれている。第二に、全般的な傾向として、知育的な発達を求める姿勢が直截に出てきている事である。次に各項目の内容を簡単に見渡してみよう。

①個人的、社会的発達（幼児の学習、遊び、及び友達との協力等の習得に焦点を当てる）

- ・ 自信と自己信頼を持つ。
- ・ 適切な行動をとり、正しい事、間違っている事に気付く。
- ・ 進んで順番を守り、公正に分け合う。
- ・ 他の文化や考え方を尊重し、人と良い関係を作り、人の気持ちに対し感受性を持つ。
- ・ 文化や宗教的行事、もしくは他の体験に対して驚きを持って臨む。

- ・ 個人でも、またグループでも良く学び取ろうとする。
- ・ 集中し、我慢強くやり通す。
- ・ 実行力を持つ。
- ・ 自分の事は自分でする。

②言葉と文字（話す事、聞く事の能力獲得に焦点を当て、読み書きの能力の発達も促す）

- ・ お話や歌、詩を注意深く聞き、感じた事について話す。
- ・ 自分の考えを話したり、物の意味を知ろうとする機会を多く持ち、語彙を増やす。
- ・ 自分で話を創ったり、ごっこ遊びをしたりする。
- ・ 本に親しみ、絵や文字が意味を持つ事を知る。ペー
ジや内容が左から右へ進む事を理解する。
- ・ 自分の名前、いくつかのなじみのある言葉、アルファベットが分かる。
- ・ 言葉、文字、音節、そして詩の韻が音声と一致す

る。

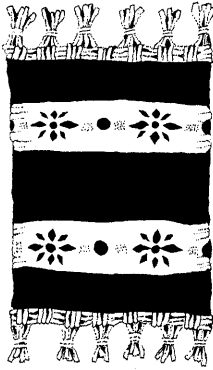
・自分の名前や親しい言葉、絵やシンボルを書いて、
色々な場面で思いを伝えられる。

③算数（簡単な数学的な考え方、及び言葉の理解。数
の基礎の発達に焦点を当てる）

・物の形、位置、サイズ、量を現すために数学的な言
葉を使う。

・数学的な考え方を知り、試す。

・分け、比べ、物を順番に並べる。



・数の韻、歌、お話、数を数える遊びに親しむ。

・十まで数え、読み書き出来る。

・実際の物を使って、足し引きの関係した簡単な問題
を解く。「足す」、「もう一つ」、「一つ取る」、「全部
でいくつ」、「いくつ残る」等の言葉が使えらる。

④世界に対する知識と理解（幼児の一般的知識の発達
をめざし、身近な環境、他の人々の生活、そして自
然と世界の未来に対する理解に焦点を当てる）

・家族の過去や現在の暮らし、身の回りの環境、将来
の目的などについて話す。

・生物の有り様や将来などについて考える。又、自然
のパターンや変化、類似や相違等について知る。

・様々な事柄がなぜ起こるのか、どのように作用する
のかについて観察し、記録した事について話す。

・切断し、接続し、折り曲げ、組み立てるような材料
を選び使う。

・この分野の学習の助けになるような技術を習得する。

⑤身体的成長（屋内、屋外における身体のコントロール、運動性、空間感覚の発達に焦点を当てる）

・身体のコントロール、共応、空間感覚の発達を促し、同時に自信、想像力を持つて行動する。

・大型、小型の道具、平均台や登坂用の機具を使い、技術を進歩させる。

⑥創造性の発達（幼児の想像力、伝達能力の発達、そして考えや感じ方を創造的な方法で表現する事に焦点を向ける）

・二次元、三次元の空間で、色彩、音、感触、形を探求する。

・幼児が見、聞き、嗅ぎ、触り、感じた事柄に対して、色々な方法で反応出来るようになる。

・美術、音楽、ダンス、お話、空想ごっこ等を通して観察力を伸ばし、想像力を養う。

・広い範囲の素材、適切な道具、楽器等を使い、考えを表現し、思いを伝える。

以上

イギリスの幼稚園でごく普通に見られる場面の背景を探るべく、成文に見られるイギリスの幼児教育のねらいを見渡してみた。そして、日本と比較してそれが学習的な色彩を持つ事、知育に比重が置かれている事について述べた。このような傾向を示すのには幾つかの理由が挙げられる。今回は、この理由について考える事から始めてみたいと思う。

（ローハンプトン インステイテュート ロンドン

客員研究員）